

# 芥川だより

発行日 \* 2025年2月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸  
 発行人 下村嘉明  
 〒661-0951  
 尼崎市田能5-3-10-601  
 ☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*

## 警備会社は高齢者福祉事業だ



世の中は、みんなのボランティアで成り立っている。その典型とも言えるのが工事現場に立つ警備員たちだ。私も警備員を始めて3年たつのであらゆる現場で職長「リーダー」になる。わが社は、無責任極まりないブラックなので、現場の警備員の配置や行動を指導する責任を私に負わされる。現場に行くまでどんな奴が来るかわからないが、着ている制服の具合でおよその経験を推測する。

現場の交通誘導は立っているだけでいい場合と適格な判断で誘導しなければいけない場合がある。しかし、その中でもキーポイントとなる位置があり、その位置にはかならず私が立つ。私から隊員に指示を出して休憩や昼食などを取り無事に一日を終わらせる。

現場監督からは、ほとんど何も指示はない。ほとんど自分が判断し配置し状況を見ながら代えていく。ところがどうしようもないような人が現場にくる。たびたび来るから厄介なのだ。まともに歩けなかったり、耳が聞こえにくかったり、まともに話が出来ない、高齢のために警備員をつけないと危ないような新人警備員が来る。よくもこんな人を採用したかとあきれれるが、しょせん日雇人と会社も割り切って現場に押し付けてくるんだ。

現場では、与えられた人で工事現場の誘導をしなければいけない。事故を起こしてはえらい損害になるからだ。人身事故にでもなれば大変だ。危険を承知で配置するわけにはいかないから、いちばん安全に立っているだけの位置を指示し何もするなと言う。そんなことをしていると、どうしても自分の休憩時間が少なくなるし、頭も使う。逆に出来る奴が来たら何も言わずとも動くから楽だ。警備に難しいことはない。交通の流れを止めずに上手く流すのが基本だ。単純な事が理解できない人が多すぎる。普通に話が出来、行動が伴う人はほんの一部だ。誰かの支えでやっとこさ生きている老人たちがいかに多いか。少ない日給でも大事な飯代になると思えば簡単に辞めろとは言えない。偉そうに言う私自身も所詮、変人の一人なんだから……。忍耐、忍耐！ しかし、おもしろい仕事ではある。

## 死をめぐるあれやこれ(122)

森永卓郎氏の死

石川 吾郎

この一月二八日に経済アナリスト森永卓郎氏が亡くなった。彼は二三年末にステージ4の末期がんであり、医者から次の桜は見る事ができないと余命宣告されたと公表していた。それからの彼の活動は、注目に値する。◆亡くなるまでの一年あまりの間、共著を含めて十冊以上の本を書いて出版している。その中にはこの欄でもとりあげた『ザイム真理教』に続く、大手メディアがタブーとして取り上げない三つの大きなテーマを暴露した『書いてはいけない』が含まれている。氏はテレビに数多く出演してきたが、あるときからぶつりテレビから干されてしまっていた。しかしラジオではいくつかの番組をもっていた。これらはユーチューブで聴けるものもある。◆その中で次のように言っている「ガンになって最強のカードを手にかけている。失うものがなくなった。次から次へ書かなきゃいけないことが出てきている。死んじやうんだったら、全部本当のことを言っちゃおう」「闘いながら死のうと決心した」と。

◆氏によると財務省はほとんど常に国民への増税を主張し政権も動かす。増税に功績のあった職員は出世していい所に天下りができる。逆に減税を許してしまうと左遷が待っている。これは徹底しており、言論の自由にまで影響が及

ぶことになる。つまりテレビや新聞社といったマスメディアが減税の論陣を張ると、たちまち国税庁による税務調査が入ることになる。これでマスメディアは萎縮し、言論統制と同じ効果となる。実際にA新聞社は税務調査に入れられ、それ以降は減税の主張を全くしなくなつたという歴史があるという。森永氏のように国民への減税を唱える論者を取り上げる大手メディアはほとんどいない(ただラジオはかろうじて免れている)。◆さらに氏は財務省がかくも絶大な権力を振るう現状を変えるためには、財務省から国税庁を分離する改革が必要だと主張する。これはしごくまっとうな主張であると私は考える。◆森永卓郎氏、享年六七才。まだいかに若い。もつと氏の議論を聞き取った。

### 芥川だより二二七号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム122	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 131	坂本一光	2
哲学者の時事放談 81	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 87	下村嘉明	4
ボケ老人の雑話 10	明石幸次郎	4
オクラの山たより 101	因了生	5
隠された歴史 76	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草 80	山椒魚	12

### 素老人☆よもだ帳 (131)

坂本一光

◆「人間はいつ自分になるか」——ある哲学者の問いかけをめぐる

「人間はいつ自分になるか」——そう問いかけた哲学者は、自分になるとは「社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かって働きかける方向を決める」ことであり、人間は人と社会との関わりの中で「自分」になる。「そのとき、人が生まれ

る」と言った。これは、鶴見俊輔が一九七二年に筑摩書房から出版した『人が生まれる——五人の日本人の肖像』の「あとがき」にあった言葉である。

この本は、田中正造をはじめとする五人の日本人がいつ、どのようにして「自分」になったかを語る異色の伝記ものだった。少年少女向けに書かれた本で、きつと息子や娘に読ませるために買ったに違いない。しかし読ませることなく、三十六歳から始めたの単身赴任先に持ち込んでいた。読んだのは五十歳のころ。そのころ私は、教員養成学部で専門の化学を教えていた。そして、専門をどう教えるかなどより、学ぶとはどういうことかを伝えることの方がはるかに大事だ。しかしそれが、自分にもよく分らないと情けない思いをしていた。同じころ、国際基督教大学の案内パンフレットをめくって出て出会った言葉があった。「人間はどう生きて来たかを知り、自分はどう生きるかと問う」という言葉である。

「人間はいつ自分になるか」と言う哲学者の問いかけと、「人間はどう生きて来たかを知り、自分はどう生きるかと問う」と言う大学案内の言葉に私はハッとされた。

それが答かどうかはわからないが、私が探していたのはこんなに単純明快なことだったのかと、肩の力がドッと抜け、自分が無色透明になっていくような気がした。ハッとしたのは、実はそんなことは遠い昔の学生時代にセツルメント活動の

中で学んだのではなかったかと思つたからであった。

振り返れば、私はいくつもの偶然に導かれて京都に来た。そしてこれも偶然だが、入学そうそう、「京都にもスラムがある」というグラウンドに建てられた大きな看板の前に立っていた。とつとつと、しかし延延と続く先輩セツラーの説明を聞きながら、この活動は自分には到底出来ないだろうと思つた。説明を拒否する勇氣はなかった。どこかで、無理をしないでどうするんだ、というその後も折りに触れて自分に湧き起つた無茶な思いに取りつかれていた。世の中のことも自分のことも誰にも負けないほどに知らない、どうすれば知ることが出来るかも知らないという劣等感にとらわれていた人間が、突然、空を飛ばうとしたのだ。

知らないというのは、社会であれ自分を含めて人であれ対象を知らないということであり、同時に対象への思いを伝える言葉や方法を知らないということでもあった。知らないということが対象を傷つけることもあったに違いない。

セツルメント活動は社会に目を向け自分に目を向けること、社会を知り自分を知ろうとする活動であった。先の言葉を借りれば、社会を知るとは人間はどう生きて来たかを知ることであり、それは社会は今どうなっているかその現実を知ることであった。自分を知るとは自分になるうとするのであり、自分はどう生き



サクランボ

るかを問うことであった。今にして思えば、偶然に導かれたセツルメント活動は、生きていくうえで何か必然的と言うべき変化を私の中にもたらしていた。この活動は私の学校だったのだ。

もうすぐ三月の初めには、百数十名のセツラーたちが長い年月を越えて京都に集う。偶然を必然にして人は生きる。偶然を必然にして時は積む。集い合う無数の必然が渦を巻くだろう。

(かたちは心であり、心はかたちになる ■大分の素老人)

## 「哲学命い」の時事放談(81)

祖蔵 哲

くアメリカを創るには

いよいよ2025年がスタートした。「今年こそは良い年に」と毎年のごとく年賀状の挨拶では書いているが、それが叶ったことはない。世界はますます危機に向かつて落ちている。その象徴が先月20日に第四七代アメリカ大統領として就任した二期目のトランプである。彼は就任演説で「アメリカの黄金期は今から

始まる。」と述べ、そして事前予告していた百件を超える大統領令への署名を開始した。これこそ「世界の終わりの始まり」であろう。その中にはパリ協定の離脱も入っている。皮肉なことに、その宣言直前にカリフォルニア州で大規模な山火事が発生している。地球環境保護に関してアメリカは昔に戻る。石油、石炭などの化石燃料採掘業の復活のためと言っているが、その作業員はすでに移民労働に頼っている。その移民を強制送還するという矛盾した政策がどこまで続くのかは疑問であるが。そのほかトランプ20は常軌を逸することばかりである。これが「新しい常識」になるのだろうか。

政治の常識離れは韓国でも起きている。十八日、ユン大統領が現職としては韓国で初めて逮捕された。これも発端はどうやら「北朝鮮陰謀論」らしい。国内では二四日、石破首相が所信表明演説をした。そのテーマが「楽しい日本を目指す」である。もうお手上げという意味だろうか、「笑える」。政治は異次元に入ってきている。それを反映してかどうか、日本でのメインニュースはフジテレビの性加害問題である。この種の問題は二三年に始まった「ジャーニーズ事件」の延長のように見える。しかし、今回の問題はさらに深く入りこみ会社組織、裏社会、そして政治との関連が想像される。だが、そこまでは追及の手が入るまい。政治が我々の社会、生活に深く入り込んで支配してい

るという構造はますます複雑化している。これは世界中がすでにカオス的システム化されているということだろう。

さて、今月は「アメリカ」を哲学してみよう。そのきっかけは問題の映画からである。

そのタイトルは『アプレンティス・ドナルド・トランプの創り方』である。

(1) トランプの創り方

この映画は昨年、アメリカで制作された。本国での公開は昨年十一月の大統領選挙の前月十月だった。監督はイラン出身であるが、イランからは国外退去宣告され現在はデンマーク国籍だ。映画の内容は、七十年代から八十年代を舞台に、気弱で繊細だった二十代の青年実業家ドナルド・トランプが反共運動マッカーシズムで悪名を馳せた弁護士ロイ・コーンと出会い、一流の実業家へと育て上げられた末に、師匠の想像を超える怪物へと変貌を遂げていく姿を描く。政治と実業界との裏での結びつきが具体的な事件で描写されているためトランプはこの映画の上映を禁止しようとするらしい。トランプ就任時、すでにアメリカでは公開中であった。だが、日本では今年の1月17日公開であるため、大統領になったトランプが上映禁止にするのかと心配したが何事もなく私は映画を見られた。予想に反して、この映画は「反トランプ」的ではなかった。そうかといって「親ト

ランプ」的でもない。見る人の立場によって変わるのだろう。だからトランプは気にしていないのかも。彼にとつては誇らしい経歴と見えるのだろう。

この映画を見て考えたことは、トランプがこの時代に突然現れたということではないということだ。アメリカという国の歴史が彼を創ったということが改めて認識できた。そういう意味でこの映画は「アメリカの創り方」である。

(2) アメリカの創り方

アメリカ大陸は1492年にコロンブスが発見したことから歴史が始まるとされている。しかし、これは紛れもなく「作られた歴史」である。なぜなら、当時のアメリカ大陸にはすでに100万人といわれる先住民が住んでいたから。宗教的迫害を逃れて、1620年にメイフラワー号より大西洋を渡った清教徒の向かった「新世界」は西欧から見た移民の歴史である。先住民からの搾取により建国されたアメリカは西欧諸国同士の植民地争奪競争の一部であり、他の植民地と同じく絶滅させられた先住民もいただろう。現地の動物バッファローなどが絶滅したのと同じように。さらに奴隷制度により単純労働から解放された白人は産業革命の担い手となり経済活動を活性化できた。

アメリカも他の西欧諸国と同じく宗教による多民族植民国家である。1775

年の独立宣言では、主権在民の共和制、三権（立法・司法・行政）分立、連邦制を基本とする世界初の成文法であるアメリカ合衆国憲法を制定した。そこでは世界に先駆けて「自由、平等」と宣言したが、それは西欧白人に限ったことである。そして、多くの連邦国をまとめるために強大な権力をもつ大統領という地位を作ったのもアメリカである。

そして独立からおよそ百年後の1861年に内乱「市民戦争」と言われる南北戦争が起こった。これは「自由」という概念をめぐる戦いであつたが、どちらとも大きな犠牲者を出したことを経験した結果、アメリカは以後「理念」を巡る争いを避けるようになった。

この経験が生んだのがアメリカ独自の思想「プラグマティズム」だ。現在のアメリカはこの思想をもとにして出来上がつている。

### (3) 「プラグマティズム」

プラグマティズムとは、物事の真理を「理論や信念」ではなく「行動の結果」で判断する哲学的思想である。簡単に言えば「実際に役立つかどうか」が基準となる考え方だ。語源はギリシャ語の「プラグマ（行動・実践）」に由来する。元々は十七世紀～十八世紀にかけてイギリスを中心起こった考え方である「経験論」の一つの基盤としていた。従来のヨーロッパの理念的な「観念論」哲学とは、概

念や認識を科学的に検証し、客観的な結果を表そうとする志向を持つ点で異なる。

プラグマティズムが生まれた背景には、アメリカでの南北戦争後の社会的混乱のほか、ダーウィンの進化論を巡る宗教と科学の対立もあつた。とくに、移民が多く多様な文化や価値観を持つアメリカにおいて、プラグマティズムは対立を乗り越え、共存を目指すための重要な思想として広まったのである。プラグマティズムはアメリカ社会における価値観の共存を支え、問題解決の手段として発展していくことになる。現代でも欧州はどちらかというと「理念型」、それに対してアメリカは「経験論的実用型」だ。

### (4) プラグマンティスト・トランプ

今年も一月に開催されたダボス会議で、EUは欧州の共通の価値「理念」を強調したが、二七カ国から構成される加盟国の間では共通の価値観は揺れている。それに対して、米国発の実用主義はどのような考えや信念も実際の影響や結果が伴わなければ意味がないと考える。外交では「アメリカ第一主義」を掲げ、自国の利益を最大化することを主目的とする。問題解決志向でもトランプ氏は「ディーリング」という言葉を多用し、問題を交渉や取引で解決するという実務的なアプローチを好む。さらに、トランプは相変わらずフェイクを「真実」だと言う。プ

ラグマティズムからすれば、現実の問題の解決に役立つならばそれは真理だ。真理は固定的ではないのだ。

さて、トランプ20政権が誕生してまだ一か月未滿、すでに世界の政治、経済は大混乱を起こしている。「映画」では、師匠が若き弟子（IIアプレンティス）トランプに勝利への三つのルールを授ける。一つ『攻めまくれ、攻撃のみ』、二つ『妥協なし、全否定のみ』、三つ『負けを認めな、勝利のみ』。なるほどこれが現在のトランプだ。忠実な弟子だな。

## 大峯奥駈道 (87)

体験型人間学 37 下村 嘉明

不運な男・X君のこと

X君は、かなり変わった男だった。

現場に行くときに通る公園のベンチに寝転んでいる。私が近寄って声をかけても返事もしない。出勤のサインをもらうために毎朝彼に、「サインしてや」と言っている。警備報告書を渡すと無言で書いて私に返す。普通は「おはようございます。あり

がとうございます」位は言う。それが朝から、その様だから、なんともやりようがない。

彼が、休憩中に飲酒していると誰から会社に通報があり急遽、彼は現場から去った。それで彼の態度も、酒が関係していたのだと気づいた。彼が言った、話によれば「自分は、大阪の高校を出て運転手を十七年ほどしていたが、飲酒運転の検問につかまり、免許になり会社も首になった」。「警備員は、一時的な仕事で、二年もして免許が取れば、また運転手になりたい」彼の話を聞きながら、「どこ的高校や」と聞くと「大阪の〇〇です」と答えた。給料はよかったのか、彼は25万ばかりもらっていたと。

次号につづく

## ボケ老人の雑記 (その10)

明石 幸次郎

元NHKアナウンサーの山根基世さん(76歳)が書いたものが、去年の月刊文藝春秋の何月号かに載っていました。山根さんと言えば、今で言う「女子アナ」とは違って、落ち着いた、深く教養が身

に付いた喋り方をしていました。テレビを見ていても(ナレーションで映像の世紀、映像の世紀バタフライエフェクトなど)、ラジオ深夜便など聞いていても、心地よくすつと耳に入ってくる「澄んだ声」で視聴者の私も強い印象が残っています。

一時期NHK局内では「朗読の加賀美幸子、ニュースの森田美紀子、ナレーションの山根基世」と称されていたようですが、その山根さんが語っていたのは、自分がモットーにしていたのは哲学者カントの「努力によって習得したよき習慣だけが善である」と言う言葉であると。それは、番組のため取材したり、そのために関連する書籍、文献を読んだり、専門の学者から聞いたりして、毎日コツコツ努力し勉強をする。それがやがて習慣になり、それで得たものが心身に備わってくると言うことのようにです。

今は、本と二合の酒があれば“幸せ”であり、誰かと飲み交わすのが至福の時のことで、同じようなことを小説家の田辺聖子さんも言っていましたね。夜、かもかのおつちゃんとお酒を酌み交わして、談笑することが至福の時であると、シンプルで一つの「幸せ」を表現しています。

山根さんは、感じる心、借り物でない自分の言葉を持つ、それは自分の目で見、自分の頭で考えて、消化して心が感じたことを「言葉」にすることが大事ですと言われています。どこからか借りて

来た週刊誌、テレビの話題で盛り上がるのもいいが、それでは、酒の談笑も浅く、その場限りで深くお互いの心に響くものにならないということですよ。

又、アナウンサーの長い経験から人の声には必ず心がくつついてくると！人が本当に人と向き合った時には、声は身体の芯から出てくるものであると。今の巷にはプレハブのような言葉ばかりが溢れている。プレハブ住宅を見ても感動しないようにパターン化された言葉には感動しないと書かれました。

この「人の声には必ず心がくつついてくる」は、私がボランティア活動としてやっている自殺防止の“いのちの電話”の相談員も心すべき言葉だと考えさせられました。

それで、私の所属する組織の活動の指導者として四十年以上も続けられ、昨年83歳で亡くなられたN氏も発する“声と言葉”の大事さを常々言われていました。何か山根さんが言われたことと通じるものがあると思えました。N氏は、電話の掛け手は聴き手の「声」自分の苦しみ、悩み、どうしようもない気持ち、死にたい気持ちなどをこの人は聴いてくれる。寄り添ってくれるかを判断するものである。「声」には聴き手気持ち、心が表れるので、掛け手はそれを敏感に聞きわけるものなんや！会って相手の顔を見ながら悩みを聴くのであれば、声だけではなく顔の表情、全体の雰囲気判断できるが、

電話は「声」だけで相手と関わるので、そこに難しさ、「面白さがあるのやと。聴き手が自分のことを聴いてくれていると話の中で、声で感じると掛け手の声も段々と気持ちが声に出て変わってくるものや——と言われていました。電話だけでお互いが通じ合うのは、難しいもので、声にもその人の人格が出るもので、良き相談員たるには、掛け手を受容出来る感性を磨くことが大事で、そのためには文学書、心理学、人とはいかなるものかなどを知るため哲学書なども読んだり、よい映画を観たりして、日々勉強しないとだめだと言われていました。そして、我々の組織はネガティブ・ケイパビリティ

(negative capability)をどれだけ相談員が持てるかにかかっている。どうしようもないことをどれだけ聴き続けられるか？ 答えの直ぐには出ないことに、どれだけ耐えられるかであると。因みにこの言葉を言いだしたのは、十九世紀のイギリスの詩人キーツ(25歳没)で、答えの出ない事態に耐える力。不確実なものや、未解決のものを受容する能力を記述したものとされます。まあ、しんどい、対価のない、成果のない、極めて効率の悪いボランティア活動だと十年やって改めて感じています。さて、山根さんのモットーである「努力によって習得した良き習慣だけが善である」をこのボケ来た老人がこれからも続けられるか？天国のN氏に問うてみた

いが、多分返ってくる答えは「明石さん、良き隣人を続けていたら、ボケる間もなく、私みたいに良き死を迎え天国に召されるで。止めたらアカン、直ぐにボケるで」と言われそうです。

## オクラの山たより(101)

困了生

一

一八九〇(明治二十三年)年の九月末に樋口家は本郷区菊坂町七十番地に転居します。一家の生計はもっぱら裁縫や洗濯によっていました。こうした内職のような稼ぎでは日に日にジリ貧状態となるのはあきらかです。この樋口家の窮状を救うため戸主としての一葉は小説家になるという決意をします。あくる一八九一(明治二十四)一月の頃のことです。この頃から一葉は断片的なものが習作をあれこれと書いていたようです。しかし、書き進むにつれて小説の技法や自作の発表手段を得る、つまり、自分の小説を商品化するという点ではどうしても師匠の

存在が必要だと痛感したのでしよう。

野々宮菊子の紹介で小説記者であった半井桃水のもとを訪れます。同年の四月十五日のことでした。桃水の文壇における力は田辺花園の後ろ盾となった坪内逍遙とは比べものにならないくらい小さかったのですが、それでも一葉は藁をもつかむ思いで、桃水を頼ったのでしよう。

一葉は書きためた小説の草稿一回分だけを持って桃水の家を尋ねたのですが、「色いと白く面(おも)ておだやかに少し笑(え)み給へるさま、誠に三歳の童もなつくべくこそ覚ゆれ」という桃水の様子に一葉はかなりの好感をもちます。

桃水は一葉にまず「女性が小説で身を立てることなど、止めた方がいい」と諭しています。桃水の回想「一葉女史」では「(小説家になるのは)私是不賛成、男子ですら小説などを書くときは、さもさも道楽者のやうに世間からは思はれる。いわんや御婦人の身で種種の非難を受けるのはずいぶん苦しい事であらう、かつ貴嬢の体質も余り強い方とは認めぬ、願はくば他の方面に、職業を求めなさい」とあります。このように桃水が言うのもつともなことであり、この時代にはまだ女性のプロ作家などは一人もいなかったからであり、しかも小説家は軽く見られるどころかヤクザな商売とまで思われていたのです。坪内逍遙などはその地位向上のために奮闘していたので

すが、まだまだでした。

こうした桃水の忠告にもかかわらず一葉は「裁縫や洗濯だけではとても母娘三人の暮しが立たぬ、いかなる批評も甘受するから是非」と食い下がりました。このあたりの押し問答は桃水の「一葉女史」には書かれています。一葉の日記には書かれておらず、「我れ師といはれん能はあらねど、談合の相手にはいつにてもなりなん。遠慮なく来たまへ」と自分をすぐに受け入れてくれたと書かれています。四月十五日の日記には桃水の美男ぶり、夕飯を御馳走してくれ人力車まで呼んでくれた親切さと桃水の美点のみが書き連ねてあります。すでに少なからぬ好意の眼で桃水を見ていたかのようです。

一葉の心にわいたかすかな恋心はともかく、この日の一葉の日記で眼を引くのは笑って語ったという桃水の文学観です。彼の主張を要約して示します。

「自分が書く小説はあくまでも父母弟妹に衣食を与えるために日本の読者の幼稚な文学観に合わせたものであつて、自分でも良しとはしないものだ。新聞小説では奸臣賊子の伝、あるいは奸婦淫女の事跡のようなものを書かねばならず、世の学者や知識人といわれるような人たちからは非難されるが、父母弟妹を食わせるために私はそうした非難も辞さない。いつの日か自分が思うま

まに書くときがくれば、そんな非難を受けるのではないだろう」

文中の「世の学者たち」とは坪内逍遙を中心とした人たちです。芸術としての小説を打ち立てるために、日本の文芸を安易低俗な江戸以来の戯作から抜け出させるべく運動を起こした坪内逍遙は第一義的には英文学者です。教師としての収入がありました。戯作になれた当時の読者に迎合せずとも生活が成り立つたのですが、もの書き以外に収入手段のない桃水は新しい文学の価値は認めながらも読者の人気を第一に考えねばなりませんでした。「芸術性だのと言う前に食うこと考えねばならない」と苦笑する桃水の心の内などは一葉にとつてはどうでもよかつたのでしよう。「家族を養うために小説を書く」という桃水の言葉は一葉を元気づけるものであつても落胆させるものではありませんでした。「読者さえ満足させ多くの支持を受けさえすれば家族を養える」という言葉を桃水から得たのですから。この嬉しさがこの日の日記で桃水の美点だけの羅列することになったかもしれませぬ。

これで小説家としてデビューしたいのだという決意の表れでした。しかし、三十一歳で世慣れた桃水から見れば一見地味で思慮深そうな娘が一大決意をして作家になろうとしても、簡単に物事が進むほど世間は甘くありませんでした。子供心から新聞は読んでいましたが、まだ一葉は新聞小説が何たるかの知識は皆無でした。第一、これから世話になろうとしていた桃水の小説すらまともに読んだことはなかつたのです。といつても鷹揚な桃水は自らものした著作を四、五冊貸し与えました。

## 二

桃水のもとに一回分の小説を置いてから一週間後の四月二十二日。一葉は新聞小説デビューの日に頭に浮かべてきつと浮き浮きした気分で出かけたことでしょう。残念ながらこの日に桃水から聞いた言葉は一葉の日記では「先の日の小説一回、新聞に載せんには少し長文なるが上に、余り和文めかしき所多かり。今少し俗調に」という言葉でした。「一葉女史」では「(一葉の持参した小説は)藻琴に見事な筆跡で指揮し短冊に出たらばと思ふものが、十行の野紙の中にさらさらとしたためられて、文章も結構でしたが少し結構すぎて、新聞や雑誌にはどうかと思はれました。その上、趣向がよろしくない」という言葉を述べたとあります。

一葉は帰り際に「したため置きたる小説の草稿一回分だけ」を半井邸に置いていきました。これが訪問の目的だったのでしよう。「一回」とは新聞掲載の一回分です。あわよくばこれを桃水が勤める朝日新聞にでも掲載してもらえないか、

たぶん、このままでは「読者の幼稚な文学観」に受け入れられるような文章でもなければ、内容でもないと内心で思っていたのでしよう。その胸のうちを知って

かいらずか、要するに長さや文体だけが問題だと受け取った一葉は「添削をお願いします」と昨晩書いた小説を半井邸に置いて帰りました。この日の日記の最後には「人一度見て良き人も二度目にはさらぬもあり。うし（桃水のことを敬って言うている。半井先生の意）は先の日ま見え参らせたるより、今日はまた親しきまさりて『世に有難き人かな』とは思ひ寄りぬ」とあつて、桃水への好意は一段と高まったように見えます。ただし、小説の内容もダメだと考えていた桃水は一葉の置いていった小説を見てため息をつけていました。「はて、どうしたものであろう」と。桃水の心の内をつゆ知らぬ一葉は二日後の二十四日に忠告を受けた桃水邸に置いてきたものを書き直すことなく、完成させた残りの原稿を桃水に郵便で送りつけました。

四月二十六日、桃水は一葉を自宅に呼び出します。一葉の小説原稿を読んで桃水は何とかせねばと思つたのでしよう呼び出した一葉に小説の書き方を丁寧に教え、自身が書くこうとしていた題材も提供しました。こう書く桃水は本当に優しい男性だと思えます。しかし、つまりは一葉が書いてきたものは桃水から見てもうにもこうにもならぬものだったという

ことでした。桃水邸に持ちこんだ作品でかつよくデビューしようとした一葉の思わくはスタートで挫折したのです。

とはいえやはり優しく親切な桃水は小説家になる、という一葉の動機が金銭にあることは十分に理解していました。困った時にいつでも相談に乗ると語り、自身の貧乏の来歴を詳しく一葉に語って聞かせました。それを聞いた一葉は「師がのたまふ所を聞けば、我が家の貧しきは未だ貧しとすべきにもあらず、君が経来たりけんこそなかなか勝りけれ」とその時の気持ちを日記に記しています。ついでながら、この日の日記には桃水の一葉との付き合い方についての彼の意見が書かれています。拙訳で紹介します。

私はまだ老い果てたという男性ではない。また、君は妙齢の女性であるのに、このような付き合い方は、はなはだ具合が悪い。……私は君を私の旧来の親友・同輩の青年と思つていろいろな話し合いをしていくので、君は私を見るに青年の男性ではなくて同性の友だちと考へて隔てなく思つたことをおしやつてく

ださい。  
この言葉の後に先ほど述べた「いつでも相談に応ずるよ」という言葉が続きます。「何ていい人」といよいよ一葉の桃水評は上がっていきます。ここから一葉の頻

繁な桃水詣りが始まります。

### 三

五月になり一葉は満十九歳になりました。八日に桃水の所で東京朝日新聞の初代主筆である小宮山即身（1855～1930 本名は小宮山桂介 号は天香 即身は別号）を紹介されます。これは一葉デビューのために桃水がお膳立てしたものでした。いつも変わらず親切な桃水です。月末には新しく書いた小説を届けに来た一葉を桃水は夕飯にと朝鮮の元山の鶴を彼女に振る舞っています。おそらく彼女の人生において最初で最後の珍味であったと想像できます。

六月になると一葉は上野の図書館に通い始めます。目的は小説の題材探し。入館料が必要であり、一回一銭五厘（三百五十円ほど）でした。もちろん一葉が図書館に通えばそれだけ樋口家で内職をする人手が減ります。それでも母と妹は許してくれました。「一葉の書く小説がお金になる」までの辛抱と思えばこそこの

とでした。  
一葉が通った東京図書館は我が国最初の公立公共図書館で一八八〇（明治十三年）に設立されています。公共図書館とはいえ利用者のほとんどは男性であり、一八八五（明治十八）年度の館内の閲覧者数は七万三千二百六十九人でしたが、そのうち女性はわずかに三十二人。一葉が

通い始めた頃でもこのような状況は変わることはありませんでした。閲覧者のほとんどは代言試験、今の司法試験の勉強をする男子学生がほとんどでした。このような図書館での様子を一葉は生き生きと日記に記しています。

いつ来たりて見るにも男子はいと多かれど女子の閲覧する人おおかた一人もあらざるこそあやしけれ。それもそれ多くの男子の中に交じりて書名を書き号を調べなどしてもて行くに「これは違ひぬ今一度書き直し来（こ）」など言われるれば、面（おも）も暑くなりて身も震（ふる）へつべし。まして面見られささやかれなどせば心も消ゆるやうになりて、しとど汗にをしひたされて文取り調べる心もなくなりぬべし。今は代言試験も近づきし頃なりとかにて法律書しらぶる人いと多かりき。思ふままのふみ借り得て読むと読む程に長き日もはや夕暮れになりぬべし。

一八九一（明治二十四）年八月八日

書名のカードを調べて閲覧票に書いて持つていくと、これは間違っているから、もう一度書き直せ、と言われて赤面する一葉です。閲覧者のほとんどが男性で、その中に一人混じって図書館を利用する一葉の緊張と周囲の好奇心とが日記の中から伝わってきます。同じ日の日記に図

書館の帰り道ですれ違った男子学生に「こち向き給へ」などとからかわれ、「書のかたはしをも読む人のしわざか」と憤慨している一葉が書かれています。いかに土族の娘というプライドを持った怒りようでおもしろいです。

もう一つ、この日の日記でおもしろいのは一葉が帰宅したときの様子の描写です。家に帰ると待ちかねていた母と妹が「いざ帯とけよ、衣ぬげよ、暑かりしなるべし、疲れつらめ、湯もわきてあれば浴びてこよ」と新しい衣に着がえさせてくれて食卓には食事の用意もできています。勤めから帰った父親、つまり一家の主を迎えるような情景です。これは一葉がまさに一家の戸主として扱われていたことを示しています。これは後年のことですが、小説家として名をあげた一葉がたった一人で男性の訪問者たちに囲まれて文学談義が出来たことは、「樋口家の娘」という立場ではおそらく不可能なことであり、一家の戸主だからこそ許されたことでしょう、一家の戸主となった一葉は一家の家計、自身の結婚など多くの悩みを持ったでしょうが、戸主であるが故に同時代の若い娘が囲まれていた枠を越えて自由に文学青年たちとの交際を結ぶことができました。このことは見落とすことはできません。

図書館の話の少し前のこと。一八九一（明治二十四）年六月十七日午後、一葉は桃水から呼び出されて先月見せた小説について助言を受けました。小宮山にも目を通してもらったとこのことで、彼の意見も入れての助言でした。この助言は一葉にはかなりこたえたようで死にたいほどだったとこの日の日記に次のように書いています。

秋の夕暮れならねど、思ふことある身には、見る物聞く物はらわたを断たぬはなく、ともすれば身をさへあらぬさまにもなさまほしけれど、親はらからなどの上を思ひそめれば、我が身一つにてはあらざりけりと思ひもかへしつべし。

書いた小説にダメ出しをされたからといって帰り道で自殺を思うほど感傷的になり、とはいえ母親や妹の身の上を考えれば死ぬわけにも行かないと思ひ留まったと書いています。この大袈裟な書きぶりで自己を悲劇の主人公化する傾向は一葉もまだまだ成長の途上の時期にあるのだということをおぼわせます。「たけくらべ」や「にこりえ」などの傑作を書いた二、三年後の日記にはこういった傾向は見事にそぎ落とされています。感傷的な女性のみまではすばらしい作家にはなれないのです。二十歳から二十四歳の死にいたる数年間の一葉の成長ぶりは素晴らしい

ものがあります。

一葉が小説家修業を続ける間にも樋口家の家計は日に日に追いつめられていきましました。修業中の一葉を除く母と妹と邦子の二人が針仕事や洗濯で稼いでもその額は微々たるものでした。妹の邦子は仕立物とは別に蟬表（駒下駄の表に貼るために籐を細く切って組み合わせたもの。特に夏に需要が多かった）の内職を始めました。しかし、蟬表を一日かけてやっても稼げる手間は十五銭（今の三五〇〇円くらい）程度でした。樋口家の一ヶ月の生活には一〇円（今の二十二、三万円くらい）は必要でしたから、女三人が頑張つて蟬表を作り続けてやっと一ヶ月の生活費プラスアルファが出るくらいでした。しかも一葉は小説の勉強中であり極度の近眼（晩年は妹に付き添われなくては外を歩けなかった）でしたから裁縫も蟬表も不得意。無理をして家の仕事やればよいよ目を悪くし頭痛と肩凝りを悪化させました。

一八九一（明治二十四）年九月に入る

と樋口家の家計は逼迫してきます。家にお金があれば人に借りるしかありません。この時期から樋口家は借金生活に入ります。

九月七日の夕方、朝から出かけていた母親のたきが機嫌良く帰ってきました。たきの行き先は三枝信三郎の家です。三枝は真下専之丞の長女と三枝惟直の子で本近辺により集まった落ちぶれ士族たち

とは違い、銀行家となつて裕福に暮らしていました。三枝は久しぶりにやってきましたに鰻を振る舞い、三〇円という大金、三ヶ月分の一家の生活費に匹敵する金額を貸してくれました。「ありがたいこと。これぞ昔の縁あつてのこと」と親子三人は喜び合いましたが、戸主の自覚を持つ一葉の心は少し複雑でした。「筆すさび」で次のように書いています。

かう落ちふれてかかること言ひ行きたりとて、誰かはものがたらひ合はせだにやはする。いふかひなきに、いづくをかなほ求め給ふや、なと思ふもいと胸痛し。かかるにつけ、身のいと甲斐なきなん、なげかはしうて、いたづらな、その身は女といふとも、はや二十とも熟れるを、老いたる母君一人をだに養ひ難きなんしれたりや。

（落ちぶれて、このような迷惑なことを頼みに行つたところで誰が話し相手になるだろうか。頼んでも甲斐なくどこかほかを探しておられるだろうと思うと胸が痛む。こんなことにつけても自分の非力が嘆かわしい。何をしているんだ私は。女の身とはいえ二十歳にもなつて老母一人養えないとは）と一葉は書き綴っています。昔の縁ある人はいえペコペコと頭を下げてお金を借りることをさせたくはないと思うが、かといつて賤業（娼妓）



に就くわけにもいかないと、この記述の後で述べています。

山川菊江の「武家の女性」によれば、貧しい田舎武士の娘は教師か女工になることが多く、対照的に没落した旗本の娘は娼妓や妾になることが多かったそうです。母たきが娼妓や妾を賤業とみなし、娘がそんなことをするくらいなら自分は死ぬと日頃から語っていたこともあって、樋口家は幕府直参でしたがそうした職業に就くことからは免れました。

たきが三枝家から三〇円を借りた頃から、本格的な樋口家の借金生活が始まります。しかし、樋口家の人たちはそのことを深く認識していなかったようです。なにしろ大金を借りたのですから返さなくてはなりません。このことにひどく無頓着なようです。

三枝家から大金を借りた翌日に母たきは知り合いの望月米吉にいくらかのお金を又貸してしまいます。それを聞いた戸主一葉の言葉は「そはいとよくもせさせ給ひしかな（それは良いことをなさいました）」です。金銭感覚はどうなっているのでしょうか。それだけではありません。この一月後には生活に窮していた植木屋の藤田某に七円を又貸しし、さらに次兄虎之助が借金の返済が滞って首が回らないと言ってきたのでこちらにも何円かのお金を渡しています。気づけば三枝家から借りた三〇円は一ヶ月ほどしか経っていないのに手元には四円しかない

という状態になっていました。樋口家の女性たちは金銭のコントロールがまったくといっていいほどにできない人たちなのでした。貧困に苦しむ人たちのやむにやまれぬ負のスパイラルに身を沈めるとなかなか抜け出すことはできません。そこから抜け出すには一葉が小説家になって稼ぐことでしたが、明治二十四年の秋はまだまだそれには至らない時期でした。

## 五

この明治二十四年の秋ごろから樋口家の次女樋口夏子は「一葉」という筆名を使い始めています。この筆名の由来には二つの話が伝わっています。

一つは「ダルマさんの葦(足)の一葉」、つまり「おあし(お金)がない」という洒落です。これは田辺花圃が一葉の回想で一葉がそう言ったと語っていることです。これが本当なら一葉がこの頃には自らの貧困を対象化して眺める余裕をすでに身につけていたといえます。

もう一つは亡くなる年に一葉自身が「身はもと江湖の扁舟みずから一葉と名のつて芦の葉のあやふきをするといへども」と日記に書いているのを見ると、「水の上をさまようひとひらの舟」という心細いあやうい存在のイメージがあります。最晩年の一葉の日記が「水の上日記」と題されたのもこのイメージからで

しょう。

いずれの話であれ「一葉」という名前に「たった一人」という彼女の思いがあるのは間違いないでしょう。小説家デビュー作「闇桜」を発表したとき彼女はしつかりとした書き方で「一葉」と署名しています。

一八九二(明治二十五)年二月、桃水から若い小説家の卵たちの研究のために雑誌「武蔵野」創刊という計画のあることを聞かされ、その雑誌への出稿を依頼された一葉はさっそく創作に取りかかりました。それから数時間の日記には萩の舎の稽古も休んで終日机に向って執筆する姿が簡略ではありますが、書かれています。

当初の予定やや遅れて「武蔵野」第一編が三月二十七日に刊行されました。桃水から頼まれて一葉が「武蔵野」第二編第三編の表紙の題字を書いています。おそらくはこの雑誌は一葉を世に出そうと桃水が企画したのだと思えますが、桃水の多忙と売れ行きの不振とで全三篇で廃刊となりました。しかし、この雑誌に一葉は処女作「闇桜」(「武蔵野」第二編、明治25・3)、 「たま櫛(だすき)」(「武蔵野」第二編、明治25・4)、 「五月雨」(「武蔵野」第三編、明治25・7)を掲載することができました。「闇桜」を活性化させた「武蔵野」第二篇を手にしたとき一葉(誕生日は五月二日)は二十歳まであと一ヶ月と少しという時期でし

た。それは田辺花圃が「薺の鶯」を坪内逍遙らの支援で刊行したのと同じ年齢でした。

## 隠された歴史(76)

満田 正賢

前回から、日本書紀・欽明紀の、大半を占める朝鮮半島関連記事と仏教伝来記事を除いたその他の記事の分析をしています。

前回は、一、「幼児期に夢の中に現れた秦大津父(はたのおおつち)を寵愛すれば、大人になって、かならず天下を「保有するでしょう」というお告げの記事、二、任那四島の百濟への割譲を決めた大伴金村の処遇に関する記事、三、大伴狭手彦の高麗戦利品を蘇我稲目に進呈した記事、を取り上げました。その結果いずれも、秦氏・大伴氏・蘇我氏に伝わる伝承を基にしながら、継体朝がそのまま欽明朝に引き継がれたという、記紀が作り出した架空の歴史を裏付けするために、新たな創作部分を付け加えて作り上げたものだと考察しました。

今回は、最後に欽明三十一年の高麗と

の交流の記事を取り上げ、欽明王朝の当時の実情に迫ります。

#### 四. 高麗との交流記事

三十一年、春三月一日、蘇我大臣  
稻目宿禰が薨じた。

夏四月二日、泊瀬の柴籬(しばかき)  
の宮に「行」幸した。越「北陸」の人江  
淳臣裙代(えぬのおみもしろ)

は、京に来て、奏して、「高麗  
の使者が、風浪に辛苦して、迷  
つて港灣を失いました。潮にま  
かせて漂流し、たちまち岸に到  
着しました。「それを」郡司がか  
くしています。それゆえ、臣が  
あらわして奏します」といった。

詔して、「朕は帝業を承けて若  
千年である。高麗は道に迷つて、  
始めて越の「海」岸に到「着」し  
た。漂「流」し「ときには」溺れる  
苦しみもしたけれども、なお性  
命を全うした。「天皇の」良計は  
広く及ぼし、至「高」の徳は高く  
大きく、仁の「教」化は傍らにも  
通わせ、広恩はひろくゆきわたるべ  
きものである。有司よ、山城の国の  
相楽郡に「賓」館を建て浄めとの  
えて、厚く助け養え」といった。

この月、天皇は、柴籬の宮からも  
どった。東漢氏直糠兒(あらこ)、  
葛城直難波を遣わして、高麗の使者  
を迎え、召した。五月膳臣傾子

(かしわでのおみかたぶこ)を越に  
遣わし、高麗の使を饗「応」した。大  
使は膳臣が皇華「宮廷」の使だとく  
まなく知った。そこで道君「郡司」に  
語つて、「汝は天皇ではない。我が  
疑つていたとおりだ。汝はまったく  
「地に」伏せて膳臣を拝した。いよい  
よまた「汝が」百姓なのを知るに十  
分のことだ。それなのに先に余をだ  
まして、調をとつて自分「の懐」に入  
れた。すみやかにもどせ。わずらわ  
しく言葉を飾「つて言い訳」するな  
よ」といった。膳臣は、これを聞いて、  
人にその調を探索させ、あま  
すところなくかえした。京にもどつて  
復命した。

秋七月一日、高麗使が近江に到着  
した。

この月許勢臣猿と吉士赤鳩とを遣  
わした。難波の津から出発し、船を  
狭狭波山「大津市逢坂山」では引き  
越え、飾船に装つて、近江の北山「琵琶  
湖北岸か」に行き、「高麗使を」迎  
えた。ついに山背の高城(こまひ)  
の館「相楽の館」に案内し、すぐに東  
漢坂上直子麻呂、錦部首大石を遣わ  
して、守護とした。また高麗の使者  
を相楽の館で饗「応」した。

まず、記事の中にある「朕は帝業を  
承けて若干年である」についてです。  
この記述は驚くべき記述です。この

記事は欽明三十一年条の記事です  
から、「若干年」は明らかに不適切  
です。この記述について、『岩波版  
日本書紀』の注釈には、「北野本等  
に『若干十年』とあるが、ここは書  
紀編者の作文で、欽明朝の紀年を確  
定した上で数字を入れる予定がそ  
のままになったものか」と記されて  
います。この注の解釈は理解しがた  
いものです。

そもそも日本書紀の記述に従つた  
歴史解釈ではこの言葉の意味は理  
解できません。欽明天皇は、仁賢天  
皇の皇女であり継体天皇の皇后と  
なった手白香皇女が生んだ、近畿天  
皇家の正統な系図を保証する嫡子  
であり、庶子である異母兄の安間、  
宣化から、当然のように禅譲を受け  
た天皇として記紀に描かれていま  
す。しかし、私の想定した「蘇我馬  
子が創作した架空の欽明王朝」という概  
念に従えば、理解可能です。

私は「隠された歴史(22)(23)」に  
おいて、「欽明天皇は、実は継体天皇と  
手白香皇女の間の子ではなく、筑  
紫・那津官家に移つた宣化の嫡子・  
倉之若江王(日本書紀では稚綾姫皇女と  
いう女性に置き換えられている)に対し  
て、近畿に残つた安閑と春日山田皇女(欽  
明は山田皇女に政治を任せたいと要望し、  
自らの皇太后に据えている)であること  
を解明しました。そして、「欽明王朝は、

欽明の後の敏達期において、はじめて蘇  
我氏が牛耳る近畿における地方政権とし  
て機能するようになり、独自の史書に記  
され始めた」と想定しました。しかし実  
際には、欽明三十一年の頃に「朕は帝  
業を承けて若干年である」という状  
態が生まれていたと考えられます。  
すなわち欽明紀の最後の頃になつ  
てようやく「欽明王朝」の実態が始  
まり、欽明が支配者としての自覚を  
持つようになったという事実を漏  
らしてしまつたのではないでしょ  
うか。

その引き金になつたのは欽明三十一  
年の蘇我稲目の死去だと思われま  
す。逆に言えば、蘇我稲目の後を引き継  
いだ蘇我馬子の登場によつて、始め  
て欽明王朝が実態を持ち始め、九州王朝  
の支配から距離を置くようになったと考  
えられます。欽明王朝は、実際には蘇我  
氏など近畿在住豪族が牛耳る地方政権と  
考えられますが、このころから政権とし  
ての実態を持ち始めたと考えられます。  
そして、地方政権たる欽明王朝が、百濟  
及び後期九州王朝と対立関係にあつた高  
句麗との、独自の国際交流を始めた。そ  
れがこの記事ではないでしょうか。

この記事の前には高麗(高句麗)との  
交流記事はありません。唐突に高麗の使  
者が漂着したという記事がでてきます。  
従つて、この使者は近畿王朝との交流を

目的として正式に高句麗から派遣された使者ではなく、単なる高句麗人の漂流者だったと考えられます。欽明王朝はこの漂流者を高句麗との独自の交流を始める絶好の機会と考え、高句麗と欽明王朝を繋ぐ使者として扱ったということが真実であろうと思われます。それを高麗（高句麗）との始めての国家間の交流に仕立てたのが、この記事であると考えられます。

この時高麗の「使者」との合流に関する記述は、実にリアルに語られています。高麗の「使者」は越の国から琵琶湖の北岸にたどり着き、欽明王朝の使節は、難波から淀川を遡って琵琶湖に行き、近江の北山（琵琶湖北岸）で高句麗の使者を迎えています。そして山背の相楽の館（京都府木津川市）以前恭仁京があったところ）で高麗の使者を饗応しています。このあたりの描写は実に詳細に語られています。欽明紀全体に見られる創作の匂いは感じとれません。

そして、欽明王朝は、この時を境にして、越の国の港（敦賀あたりか？）を独自の外交の窓口にしたと思われる。た

しかに地理的には、百済は老岐対馬ルートで倭国と交流することが自然であり、高句麗は越の国にダイレクトに向かう方が自然だと思われま。しかし、筑紫には外国の使者を迎える立派な迎賓館がありました。博多駅の南に広がる比恵・那珂遺跡にその痕跡が残っています。一方

越の国ルートでは外国の使者を迎える場所は、当時すでに存在していた相楽の館です。九州王朝と百済との交流ルートを避けるルートが成行きの出来上がったことよって、欽明王朝の独自の国際交流が可能になったと言えるのではないのでしょうか。

私は、「日本書紀の欽明紀は、ほとんど後期九州王朝の史書と百済本記に依存している」蘇我馬子が創作した架空の欽明王朝は、欽明の後の敏達期において、はじめて蘇我氏が牛耳る近畿における地方政権として機能するようになり、独自の史書に記され始めたと考え、「という想定の下、欽明紀の朝鮮半島記事、仏教伝来記事以外の記事の分析を行ってきました。そして、前月考察した三つの記事の考察結果では、欽明紀は、百済本記や九州王朝の史書の記述に、秦氏、大伴氏、蘇我氏などの家伝を切り取って加えることよって、近畿中心の歴史を作り出そうとしていることを読み取ることが出来ました。

一方今回の高句麗との交流記事によつて、架空の欽明王朝は、敏達期を待つことなく、欽明期の終わり頃、蘇我氏の実権が蘇我稲目から蘇我馬子に移り始めた頃からその実態が機能するようになり、歴史も記述されるようになったことを読み取ることが出来ました。

## 俳句

影山 武司

丹の橋を越え神域の冬紅葉  
孤高なる天守へ冬の落暉かな  
鉤の手の石垣高し虎落笛  
蠟梅の垣越しに問ふ安否かな  
蚤の市毛足の光る冬帽子  
北風稜線尖る富士の峰  
凍滝の黙閉ち込めてをりにけり  
探梅行杣道の空つと広し  
早梅や幼の頬のぷつくりと  
アルペジ才弾く指先春近し

## 編集後記

SK生

▲梅も近所であらほらとほころび始めたが、まだまだ寒い。「梅一輪一輪ほどのあたたかさ」という古句もあるが、やはり寒い。おまけに昨年来のコメの値上がりは少しも元に戻らずキャベツなどの値上がりは目をむくほどだ。背筋が寒くなるのは気温のせいだけではない。▲海の向こうでは

トランプ氏が米国大統領となつて世界中

が引つ掻き回されている。「関税を上げる」「地獄を見るだろう」と氏が語る脅し外交は一九世紀にはやった砲艦外交さながらだ。おまけに最近ではトランプ氏が「私法を超える存在」とまで言ったという報道まであった。▲SNSによるフェイクニュースの氾濫、人々を混乱させる陰謀論の横行で今までも民主主義の危機は何度も叫ばれてきた。民主主義の劣化は「何を言っても政治は変わらない」という絶望感と無力感に何よりも起因するといつてよい。「右を向いても左も向いても世の中、真つ暗闇じゃござんせんか」とうそぶきたくもなる。だが、そんな気分が落ち込むのが危ないのだ。▲光がないわけでもない。小生の住む宇治市で中学三年生の女生徒が「生徒を交えた学校のルール作り」ができるようにしてほしいという請願を宇治市議会に提出し、さらに市議会でその趣旨について臆することなく発言したという。残念ながら請願は議会内の保守勢力の反対で聞き届けられなかったが、自分の要求を正当な方法で行動に移した中学生の勇氣に敬意を表したい。▲絶望してはいけません。虹を見たいなら顔をあげなさい。とかつて喜劇王チャップリンは映画の中で人々に語りかけた。今、その言葉が輝いて見える。「虹を見たいなら上を見るのです」。下を見てはいけません。この言葉を胸にもうすぐ来る春の風を待ちたい。

応募川柳誌上句会の選評②

今回は選評の第二回目の結果である。選評中、五七五になっている「」書きの部分は、前回と同じく選者の川柳である。川柳には川柳の返句がいい。

○課題「動機」の部

特選

やさしさにふれてやさしくなってきた

友遊

秀句

深呼吸すると人間らしくなる

まゆみ

桃太郎へ欲か正義か動機問う

美佐子

沸沸と怒りのペンが動き出す

菜摘

【選評】

特選／句の背景は何か。誰かのやさしさに触れて、越えるべき山を越えたか。「一つ山越えてやさしさ深くなる」。人間賛歌だ。

秀1／あわただしい日常、ふと立ち止まり深呼吸して自分を取り戻す時。

秀2／桃太郎に向かってこんな問いがあったのか、脱帽。

秀3／ペンは剣よりも強い。主権者の一票が国を変えることだってある。

○雑詠の部

特選

銭形の平次の銭は公金か

輝蔵

秀句

アテルイの里に眠った鶴彬

栄宣

ほろ酔って森羅万象愛おしむ

健二

争いへ支配されない羅針盤

さとみ

【選評】

特選／総選挙の争点「裏金」「不記載」問題から生まれた時事川柳の名句。お見事。

秀1／アテルイは8世紀末ヤマト朝廷と戦った蝦夷の族長。先の大戦下に川柳で反戦を貫いた鶴彬も岩手に眠る。いま二人は何を語り合っているか。

秀2／「森羅万象人間というひとかけら」。そう思える人間だからこそ、ほろ酔いながらも世界のあらゆることを愛しいと思うことができる。

秀3／北極星は常に北の頭上に輝く旅人の道標。争いにも何事にも支配されず北を指し示す羅針盤が今必要だ。

後日談がある。この川柳誌では毎月実施している十一の各種誌上句会で特選に選ばれた二十二句から、読者の投票によって誌上句会大賞を選び翌月に発表、賞状と記念品を贈っている。何と私を選んだ「銭形の平次の銭は公金か」が、この月の特選の中から大賞に選ばれた。申し添えるがこの句は、ほかの四名の選者それぞれが選ぶ60句の入選句にも入っていないかった。特選句に選ばれるか、また入選句となるかの一義的な基準は無いのだ。選者も読者も、自分に最も響いた句が最もいいと思うのである。

一頁を使い、写真入りで受賞者の喜びの言葉が紹介されていた。  
 … 銭形平次の「銭」については、長年その財源について疑問を抱いていたもので、裏金問題で政局が大きく揺れる中、ふとその思いを句にしたものであります。…  
 作者はきつと、降ってきた言葉をそつと受け止めたただけなのだと思う。いい句が生まれる所以である。



シクラメン



マーガレット